

<2016年7月月例会報告>

ある女子サッカー選手の異文化体験
—アメリカ、スウェーデン、ザンビア—

野口亜弥 (スポーツ庁国際課)

【日時】2016年7月16日(土) 17:30~19:30 (終了後は御茶ノ水駅前「かめや長英」)

【会場】JFAハウス4階会議室6

【演者】野口亜弥 (スポーツ庁国際課)

【参加者(会員・メンバー)15名】

梅本嗣(博報堂)、大河原誠二(筑波大附OB)、加納樹里(中央大)、岸卓巨(日本スポーツ振興センター)、北田典央(会社員)、小池靖(さいたま市・サッカースポーツ少年団)、白井久明(弁護士)、田中俊也(三日市整形外科)、遠山諒(国際基督教大学)、徳田仁((株)セリエ)、中塚義実(筑波大学附属高校)、野口亜弥(スポーツ庁国際課)、守屋俊秀(東京2級SR)、守屋佐栄、吉原尊男

【参加者(未会員)7名】

JFAレフェリーカレッジ11期生 … 宇田川恭弘、小野祐太、鈴木智也、手塚優、松坂樹、柳岡拓磨

カレッジマスター … 太田潔

【懇親会から参加】

安藤裕一、春日大樹、嶋崎雅規

【報告書作成者】野口亜弥

(目次)

1. 自己紹介
2. アメリカのNCAAについて
3. スウェーデンの女子サッカープロリーグについて
4. スポーツの可能性(ザンビア)



1. 自己紹介

- 十文字高校 (2003-2006) サッカー部。
- 筑波大学 体育専門学群 (2006-2010) サッカー部。
 - インカレ2度出場
 - 東関東選抜で東西対抗戦出場, 北関東選抜で地域対抗戦出場
- アメリカに渡米 (2010-2014) 4年間全額奨学金を取得
 - フランクリンピアス大学に就学 スポーツマネジメント専攻
 - フランクリンピアス大学大学院 MBA 経営学修士取得
 - サッカー部に3年間所属、1年間アシスタントコーチ
- New York Magic で4年間プレー (2013年シーズンキャプテン)
 - Wリーグ (セミプロフェッショナルリーグ・全米女子サッカー2部)
- 国際女子サッカー選手権大会出場 (2013)
 - チェルシーのゲストプレーヤーとして
 - (永里選手が所属していたときに日本に来日)
- Linköping FC (スウェーデン)でプレー (2014年春)
 - Damallsvenskan (スウェーデン女子プロリーグ)
 - セカンドキャリアを考え現役引退
- ザンビアのスポーツ NGO でインターン (2015年春)
 - NOWSPAR というスポーツを通じた女性と女の子のエンパワーメントを行う団体
- スポーツ庁国際課 (2015年秋～)
 - スポーツ・文化・ワールド・フォーラム (今年10月)

今回は、自身の経験を軸にしながら各国のサッカーの違い、システムの違いを紹介します。

2. アメリカの大学スポーツについて

海外に留学したいと思った理由は、英語を身につけたい。違う文化の中で生活してみたい。という2つの動機からです。自分が今までやってきたサッカーを活用して留学したいと思いました。また、アメリカの大学スポーツシステムは大変魅力的でした。

<充実したアメリカ大学スポーツ>

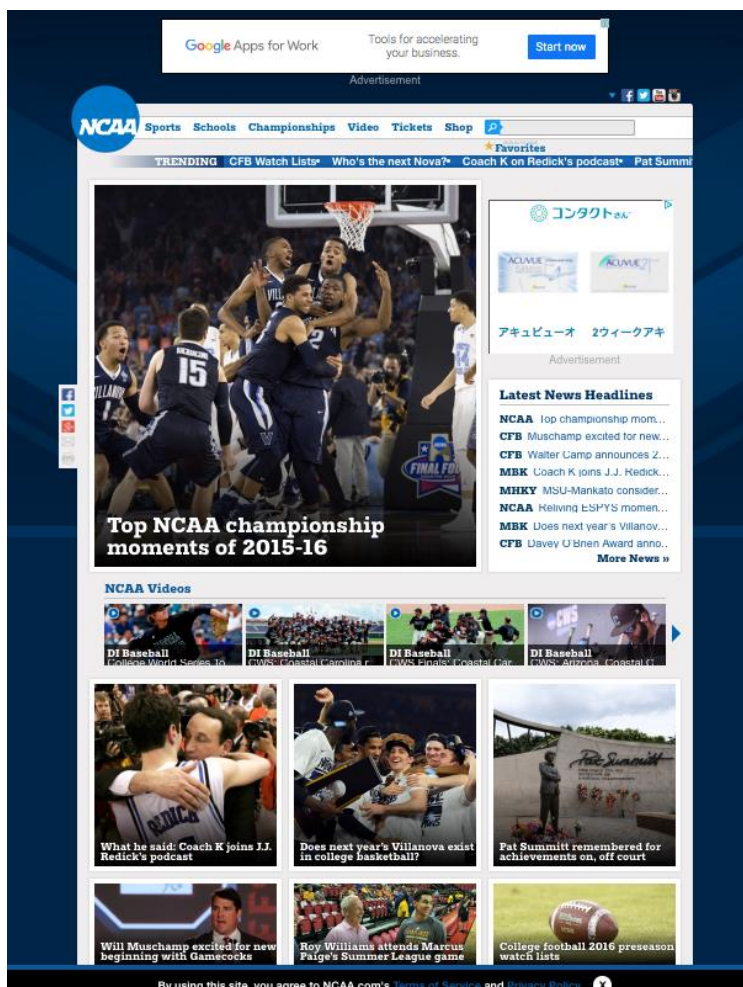
- 奨学金制度
 - 授業料、寮費、食事代、遠征費、用具代
- 施設の充実
 - プロのアスレチックトレーナー、ストレングスコーチ
 - トレーニングルーム、アスレチックトレーニングルーム
 - プロのサッカーコーチ、アシスタントコーチ (フルタイムのコーチ)
- 学部多様性 (スポーツをしながらやりたい勉強ができる)

- 経営学、心理学、生物学、IT、教育、スポーツマネジメント etc....
- 単位が足りなかったり、成績が悪いと、部活動への参加を禁止される。学生>選手

<NCAA>

全米の大学スポーツ全体をまとめているのが NCAA です。ディビジョンが1、2、3と分かれています。大学の規模、総生徒数等で決定しているため、一概にディビジョン1が必ずしも強いわけではありません。また、NCAAは公平性を大切にしているため、練習回数や練習試合の数など全てルールで定められています。プレシーズンがスタートする時期や奨学金の数、加盟できる選手の条件なども定められています。チームの独自性は出しづらいますが、公平性は保たれています。またアメリカはシーズン制であり、9月～12月の頭がオンシーズン、8月はオフシーズンとなります。オンシーズンは公式戦は1週間に2回ほど入りますが、オフシーズンは練習回数がかかり減ります。ボールを触っていい練習は週2回までなどの規定もあります。そのため、オフシーズンは筋トレ走り込みトレーニングなどを行います。オフシーズンの練習強度が下がるため、アメリカ人はシーズンの違うスポーツを2つ掛け持ちしている場合もありました。さらに、夏休みは一切活動がなくなるので、サマーリーグに所属をするなどしてコンディションを整えます。

NCAAのルールの中で大学スポーツをすることがその大学の方針と合わない大学が集まり、NAIAという組織を作っています。また短大は別でNJCCAという組織もあり、それぞれいくつかのディビジョンに分かれてリーグが行われています。



<Q&A>

- Q. NCAAに関して文科省と経産省がやっているが、気になる点はあるか。
- A. どこまで大学スポーツにお金をかけてくれる人が現れるのか？が大きな問題となるだろう。そもそも日本は教育の延長線上でスポーツが発展してきた。また、ビジネス化した際に今まで日本のスポーツが大切にしてきたものがなくなってしまう恐れもある。
- Q. アメリカの高校ではスポーツはどうなっているのか。
- A. アメリカにも部活動はあるが、そこまで厳しくない。一生懸命やりたい子はクラブチームに所属して活動している。

- Q. 高校生はその頃から大学の奨学金を意識しているのか。
- A. リクルートしてもいい年齢などが厳しくルールに定められている。そのルールの範囲の中で積極的に高校の頃から大学選びが始まっている。高校3年生の頃には行く大学が決まっているのが通常である。
- Q. どんな人たちが投資をしてどうやって回収しているのか。
- A. 学校が分配するお金にアスレチックディヴィジョンの分がきちんと予算配分されている。それに加え、チケットセールスであげた利益を活用する。また、男子が上げた利益は女子にも使う。アメリカにはタイトル IX という法律があり、教育機関におけるスポーツでの男女平等が定められている。そもそもの予算は寄付金等を活用し、国からの予算は出ていない。
- Q. 野口さんが教わったコーチのバックグラウンドは？
- A. イギリス人のコーチに教わっていて、イギリスでプロ選手だったので、その経歴を活用してアメリカのライセンスを取得していた。また、大学でプロコーチになるのに、ライセンスは絶対ではない。
- Q. アメリカと日本のスポーツビジネスの違いは？お金を回収できないのは、人材的な問題？システム的な問題？
- A. アメリカは経営学を学んでいる人が多い。スポーツ法を勉強している、マネジメントを理論的に学んでいるひとがスポーツ現場で活躍している。
- Q. 日本の課題は何か。
- A. 個人的な意見として、NFを運営している人たちはマネジメントや経営学を学ぶ時間がなかった人たちが運営しているところが問題かも知れない。
- Q. NAIA はメジャーではないのか？大学はチームの人数を制限しているがどれくらいの人数なのか？
- A. NAIA に加盟している大学だけでも500くらいある。だが、NCAA が大きすぎるので、それと比べるとマイナーである。外国人選手の登録などはNAIAの方が規律が緩い。そういったメリットを好んで、NAIA に所属している大学もある。部員の数だが、アメリカでは、「大学サッカーをした」という一種のステータスがある。なぜなら、誰でも大学の部活動に所属できるわけではないからだ。スポーツは大学がサポートするものである。という考え方があるので、予算の範囲内でカバーできる人数しか大学側は取る事ができない。
- Q. 野口さんがいた学校では他にどんなスポーツがあったのか？
- A. 強化指定の部活動は、バスケ、バレー、サッカーなど。部活動はクロスカントリー、陸上、アイスホッケー、ラクロス、フィールドホッケーなど。
- Q. 強化クラブに入らない学生はどこで運動しているのか？
- A. それがないのが問題である。市の大人のクラブに入ったりしている場合もある。高校までやっていた人たちのやる場がなくなってしまうことがアメリカでも課題になっている。
- Q. 大学がスポーツ施設を持っていたら、空いている時間に他の人も使えるのでは？
- A. シーズン制なので、フィールドが空いている季節はあまりなく、アスレチック専用の場所は一般の学生には解放していないので使用できない。

Q. スポーツは事業戦略として使えるように感じるが、かなり重要なファクターになっているのか？
他にはないのか？

A. 文化関係のところは分からない。スポーツは別格のようだった。

Q. 練習も日・アメリカで違うのか。

A. コーチングスタイルは国によって違う。また、アメリカは様々な出身の人がコーチしている。アメリカのスタイルというよりは、そのコーチが何をするのか。イギリス人コーチだとザ・イギリスのようなプレーだが、イタリア人コーチに教わった時は、堅守速攻だった。それぞれのコーチに合わせて調整することが選手として重要であり、日本人はそれが苦手だと思う。

Q. 本来の学生としての学業はどうだったか。

A. みんなきちんとしている。課題も多い。授業にきちんと出て、成績をおさめないと部活ができなくなってしまう。これも NCAA のルールに定められている。

Q. 運営などに学生が関わっているのか？

A. しない。そこが私は寂しいと思っていた。全てが整っているので、全てやる人がいる。そういう所は、日本の部活動の素晴らしいところだと思う。

<Bridge>

Bridge という NPO 団体が3月に毎年アメリカ女子サッカーツアーを組んでいて、それをきっかけに、アメリカの現状を知りました。最近、スポーツ庁でも NCAA は注目されているし、男子サッカーでもエージェント業務のように幹旋しているところは増えてきています。アメリカに行って、英語が使えるようになり、日本だけではなくネットワークが広がり、選択肢と可能性が広がったと思っています。また、これがきっかけに、スウェーデンでプロサッカー選手になることができました。

3. スウェーデンの女子サッ

カープロリーグについて

スウェーデンの女子プロサッカーリーグは Damallsvenskan という12チームのリーグがあり、女子も学生以外は全員プロとしてプレーしています。スウェーデンはヨーロッパでは強いリーグであり、ドイツ→フランス→スウェーデンの順でリーグのレベルが高いです。アメリカの女子サッカーはスウェーデンとフランスの間くらいではないかと思っています。スウェーデンリーグは、北欧の代表選手や、ユース年代の代表選手が多いです。

男子サッカーだと日本でもエージェントがいますが、日本の女子サッカーにはあまりいません。ヨーロッパは国をまたいで移籍することが多いので、女子にもエージェントがついており、チームのほ





とんどの選手にエージェントがいました。スウェーデンの女子サッカーリーグが発展している理由は、社会的に女性の地位が高く、女子であろうと投資してくれる環境が日本よりも整っているように感じました。また、女子サッカーもファンサービスを大切にしており、地域の女の子のサッカーチームについて一緒にサッカーをしたり、スーパ

ーの前でイベントをしたり様々な活動がありました。選手がチームと契約をする際に、そのような活動に参加することも選手の契約書の中に記載されていました。

スウェーデンのチームとの契約が満了した際に、セカンドキャリアを考え、選手としてのスポーツとは別の関わり方をしようと思いました。

〈Q&A〉

Q. エージェントはどこからお金をもらうのか。

A. 女子の場合は何人か抱えていて、契約が決まったらチームからもらう。

Q. スウェーデンのプロチームは女子だけやっているのか？

A. 私のチームは男子のプロサッカーはないが、男子のアイスホッケーチームを持っていた。基本的には、女子は女子のお金を使うが経営が傾いたら男子にも助けてもらう。企業さんが女子にサポートしてくれている場合が多い。

Q. 当時の生活は？

A. 一人暮らし。朝ご飯、筋トレ、練習、夕飯、帰宅。空き時間で勉強。スウェーデンは女性でもフルタイムの仕事を持っていないと一人前と見なされないのので、選手も大学や大学院に行って勉強していた。

4. スポーツの可能性

America SCORES アメリカ

アメリカの国内には貧富の差があり、貧富の差からくる社会問題をサッカーを通じて解決しようという団体がありました。この団体のユニークな取り組みはサッカーを上手くなる。1番になろうではなく、サッカーをツールとしてライフスキルを高める団体であるということでした。学校の先生がコーチとなっていじめ問題や環境問題について考えます。例えばサッカーを通じて健康問題を考えようということで、ラップの歌詞を制作します。「僕はサッカー選手になりたいからハンバーガーは食べないよ」とい



った歌詞を子供達を書いたりします。ただ単に健康問題を勉強するとあまり面白くないかもしれませんが、サッカーを使って子供に自分ごととして考えやすくする。それは日本にはあまりない教育方法かなと思いました。

また、日本で行われているピースボールアクションというものをアメリカでやりました。アメリカでは大学スポーツシステムがしっかりしているため、ユニホームやボールが多く余ります。そのため、何か初めてみたいと思い、ピースボールアクションの活動をアメリカでやってみることにした。グアテマラ、インド、ブラジルに大学で集めたスポーツ備品を送りました。

このような活動を通して、スポーツを通じた国際開発に興味を持ち、持続可能な開発目標をスポーツを通じて進めて行く事に興味を持ちました。中でもジェンダー平等に関心が高かったので、ザンビアにある NOWSPAR でインターンをすすめることにした。

NOWSPAR は以下のことを実行している団体です。

- スポーツ界の男女平等促進。スポーツを通じた社会男女平等の促進
- 女性のスポーツの現状を発信
- スポーツ団体と男女平等制作やセクシャルハラスメント制作の実行、サポート
- 女性とスポーツに関わる最新の国際的研究やデータを調査

少女と女性に様々な知識と技術をスポーツを通じて教える（保健衛生、HIV/AIDS、安全な妊娠出産、女性の人権、IT技術、コミュニケーションスキル、リーダーシップスキル、お金の使い方）



スポーツを通じた女の子のエンパワーメントのカリキュラムがあます。それを用いて、ボールゲームで学んだ事が日常生活にどうやって生きるのかを子供達に伝えていくカリキュラムとなっています。また、スラムの子供達へのサッカー指導、母校を巻き込んだドネーションプロジェクトなども行いました。

また、Discover Football というドイツで行われたイベントにザンビアの職員として、コーチで参加しました。世界各国から女子サッカー選手、コーチ、審判、ジャーナリスト、

マネージャー約100人が集まり、女子サッカー界と社会全体に置ける女性の権利について話し合い、サッカーをツールとして問題解決に取り組むイベントでした。出会った人や仲間から彼女達が直面している問題を直接聞く事により、自分ごととして、世の中で起きている社会問題を考えるようになりました。

このように出来た輪は今も広がっており、今でも、Women Sport Leadership Academy(WSLA) 2016 などといった、各国のスポーツ界における女性スポーツリーダーが集るワークショップなどにも参加しています。

こういった経験を積んで、スポーツの価値を感じるようになりました。そして今はスポーツ庁に所属して、スポーツの社会的な価値をもっと高めるために、スポーツ・文化・ワールド・フォーラムの準備をしている。特に、スポーツ・文化・ビジネスの3つの領域で世界経済フォーラムにも協力してもらいながら、準備しています。

〈Q&A〉

Q. どのNGOだったんですか？

A. ザンビアのNGOです。

Q. 野口さんのステータスは？

A. インターンです。

Q. 期間はどのくらいですか？その間お金はどうしていたのか？

A. 6ヶ月間はスウェーデンで貯めたお金を使っていった。

Q. 給料をもらいながら行くのはあるのか。

A. 有ると思うが、ザンビア人の雇用機会を使って自分の勉強のために残るのはどうなのかと思った。

Q. この団体の資金援助は？

A. ザンビア政府、オランダのNGO、ノルウェーのオリンピック委員会



(以上)